# 父の川柳遺稿集に思う。

北広島医師会 坂泌尿器科北広島クリニック

# 池田 龍介

1995年は1月の淡路島北部を震源とする阪神淡路大震災によりその年が始まり、3月には、日本中を震撼させるオウム真理教による地下鉄サリン事件と不吉な年であった。この年6月18日、小生の父 池田昭雄が享年68歳で天馬のごとく旅たった。昭和29年に、岡山県の山間部(ミツバチで有名な山田養蜂場の里に近く)に内科医として小さな医院を開業し、午前は外来診療、午後は夜遅くまで往診に明け暮れた日々であった。そうした日々から、

## 野分吹く風に逆らう往診医

生涯を往診医として喜寿近し

日々の診療の中、唯一の趣味は、往診中の車内で聞く8トラックの落語・浪曲・演歌全集であった。

さいはての海を絵にする演歌集

運動にも無縁であり、読書する姿ばかりであった。 その頃の自分を、

遊びとは無縁に生きて古希近し あるいは、

遊ぶ二字俺の辞書にはのってない

そうした中、運動など皆目無縁と思っていたが、60歳前から始めたゴルフは、母親に怒られながらも 道具をあれこれ調達してなかなかの熱の入りようで あった。

### 趣味ゴルフ書くには少し老いすぎた

自分でもゴルフがかなり面白かったようである。 また、酒も好きであり、往診後やコンペの終わりな どかなりの量を楽しんでいたが、患者さんに飲酒に ついて問われても、口ではきつく注意するものの、 その本心は、

百薬の長に仕えて身を毒す しかし、

断酒とはしっかり云えぬ飲める医者

最近の小生をみるようでもある。

田舎の一開業医として日々、過疎の始まった地域 の医療保持(当の本人は全くそうした特別な意識も 無く、淡々と求められるがままであったと思われる が)の日々であった頃、

同じ人に亦会いたるか過疎の道

過疎の谷彼岸の時だけ人多し

小生は、全く異なる専門を選び、大学の関係で金沢に住み、なかなか父とじっくり話すことはなかった。自分なりに大学に在籍する人間として診療・研究・論文作成と一応は頑張ってきたつもりであり、それなりに助手、講師、助教授と昇進し、その都度、

父に報告してきた。さぞかし喜んでくれているもの と思っていたが、遺稿集で初めてその頃の思いを知 った。専門違いでも、地元に帰り手伝いをして欲し かったのであろう、一切口にはしなかったが…。

#### 教授への道近ずいて故郷遠し

そうして、忙しく休むことなく機関車の如くに慌 ただしく働きづめの毎日であった父だが、徐々に体 調の不良を自覚するようになったようで、

古希近し生きた成果に悔い多し古希近し一寸休めと肝不調

父にしては弱気な句が詠まれている。身体が思うように動かなくなってきたようである。いよいよ1995年4月入院となり、入院後3ヵ月で正に天馬の如く天に駆け上がっていった。

自分史の終わりに載せる闘病記 老醜日々無残なり病臥中 なんとまあ蚊が素通りするやせた肌 百薬の長に到々破門され

ちょうど父と同じ年となった今年、本土から北海 道に仕事先を変え、3月終わりにコロナ禍の関東から慌ただしく転居した。転居に備え、これまでの不 用品整理中、すっかり忘れていた父の川柳の遺稿集 を見つけた。遺稿集が届いた当初は、さっと目を通 しただけでその存在を忘れていた親不孝者である。 先にも述べたように、生前は岡山、金沢と離れた生 活から、父とじっくりと話すこともなかったが、父 と同じ年になり、一句一句に父の心境が理解でき、 やっと父とじっくりと話をしているようで、すっか り転居準備も忘れ読み耽ってしまった。この度、医 師会からの原稿執筆を依頼されたのを機会に、池田 天馬の川柳の一部をご披露させていただきながら、 また改めて久しぶりに父との会話の機会をいただい たことに感謝申し上げたい。

資料:池田天馬川柳遺稿集